

* 「その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされた。そして、ピリポを見つけて『わたしに従って来なさい』と言われた。ピリポは、ベツサイダの人で、アンデレやペテロと同じ町の出身であった。彼はナタナエルを見つけて言った。「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。」

(ヨハネ1:43~45) アンデレが「キリストに会った」と確信して、すぐさま兄弟のペテロのところに連れて行ったように、ピリポも同郷のナタナエルにナザレのイエスがキリストであると確信して伝えた。しかし、ナタナエルは「ナザレから何か良いものが出るはずがない」と取り合わなかった。しかし、ピリポは「来て、そして、見なさい。」見なければわからないと、強引に？イエスの所に連れて行った。すると、主イエスの方から近づいてきてナタナエルのことを、「これこそ本当のイスラエル人だ。彼のうちには偽りが無い」と彼の内を見抜かれた。

* 「ナタナエルはイエスに言った。『どうして私をご存じなのですか。』イエスは言われた。『わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たのです。』」(ヨハネ1:48) 「いちじくの木の下にいた」とは、ラビ(ユダヤ教の教師)がいちじくの下で律法の話をするのをよく聞いていたということであろう。ナタナエルは会ったこともないイエスが自分のことをすべて知っていることに衝撃を受け、この方こそ神の子であり、メシヤ(=キリスト)だと確信した。

* 多くの神の御性質があるが、「私のすべてを知っておられる」ということもその一つである。神は私たちの心のうちまですべてをご存知である。それは私たちを造られたからであり、神の愛の現れである。すべてを知っておられるからこそ、私たちはこの方にすべてを委ねることができるし、心から祈ることもできるのである。

「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。」(詩篇139:23~24) 神はすでにすべてをご存知であるけれども、なお私たちは具体的に、祈りの声を上げて、神との深い交わりを持ちたいと思う。